

b  
911.3

ス

6

911.3

ス

崇  
懲  
序

此書は既に承利等常お其の軒にわ  
かづひるの室を以て其家をすとあそばれ  
のとよの野間をもとより草と五事うゑてやれ  
せしと秋の二三ふ席とけりて火桶とけ座せら  
廣せられゆきをひそめゆくとあらまくへ茶屋  
などとあらわる者と娘のうちを堅くちき様と  
みゆく全廣の處のよきとあらとあらうす  
のとて草のくわうと其木入つまくともくわうのくわう  
その色は變のするするけりあれと國の主壽の日  
乃つとゆりて秋の月より良きとすとやくと  
翁のとて童よあらむらむとよつてととをん見を

さきひよみアシタ小首彈の後誠あくまむれ文  
かの生辰の助みをうけこへも題字とがなめり  
ハ清内雪成のへとへいのあらへやうの巻の  
あらへあくねと例がたままするをもうと急鶴不  
よき所あつてまなじの日始其甚狂の音途事  
かはれ真絶響へて再びの朝を起うるほほり其處  
よりかのそこのえありの振まう大通なりふう  
くゆすく疾のあら呼すうちまへしらふせんふと  
ぬらハ附くと種あらうて小子圓すてとと雲  
うらや此宗をえふ様と咸つうけひを耳う  
序書をよくま捨てつま風今山のせうと全集望  
桟のふ題写れづれひきに安をつう境

アドリとくちきへ

壬辰ヒ乃年夏國さつき切ニ穴田志林書

下

わらう音よのひのゆ山樂 芭蕉  
あくふ特ふ乃アシタ前 妙坂  
家始萬葉をまのせま祭を祭 全 妙坂  
上りそよふらう葉の立 芭蕉  
音お内もりくさ月乃雲 全 妙坂  
萩越たれと秋のきひま此坡  
芭院へ葉を立キカミキ 全 妙坂  
芭院はく人子あせ妙 芭蕉

奄美山中よりもさうつゞな細委を  
あぐハ西行うトム。六月  
既ナシテるまゝトモハカツ向島屋  
田中といひ知れ、お袋のりす  
逸翁、尾の持病をかえり  
あん馬をくもろのくもる翁同  
吉門<sup>ミタケ</sup>とよ某掛下地<sup>ミタケ</sup>にて  
身をおもに居合<sup>ミタケ</sup>をもき  
田舎のつゝやと群て花のほ  
門を押さん、お座内金井  
泰風<sup>ミタケ</sup>、小糸のまわせ吹ば  
めどりをまぶす眺<sup>ミタケ</sup>す

江戸の左近ひう日の事とやふを  
お詫びせられとひくをうへ  
かくふ十枚の内のうなづき  
相乃本と日さゆるなり  
門あらてあらそねる而もさ  
ひらき金そ表人ちぬ  
ちるキの女房の顔と裾をそ  
又あのまよもとおおぞり人  
ほどの湯宿をほんとださう  
たがくよがれしてあさまの葉集  
とみあを赤のすみ空をばけ  
魚子喰あくとまみ特の

あ鳥等一物ハシマリ  
未を乃ナカニテ其等日  
暮ハシマリナキモ其等をつる華  
裏風の様ハシマリ見ゆ今ノ事

利坡  
芭蕉  
利坡  
芭蕉

三吟

兼ねも蓮哉うけ 花さう  
ひらきや昔ふ覺 納常も  
月夜はまにいほのこどもと  
外とよまくお園ハシマリお櫻湯  
細くと朝日あらの青月月  
早稻ハシマリ晚櫻ハシマリお生に即

虎雪

利坡  
利坡  
利坡  
利坡  
利坡

江深ハシマリもとき海草のくじらん  
わちあらむれハ疊カク株うら  
機ハシマリの葉と蝶ハシマリを傳てくら  
すくくくくく  
拳ハシマリすくくく  
黒翁ハシマリのちく寫ハシマリを摩曉  
五百のうけを下ハシマリ坂ハシマリイ  
細ハシマリまのれは跡行ハシマリのそ  
人のまゝハシマリ處ハシマリあひやう  
群ハシマリの聲ハシマリをかうせりとて  
坂ハシマリの中ハシマリたる竿ハシマリをり  
斜ハシマリと西深ハシマリやくと升ハシマリ風  
鶴ハシマリ見ハシマリ又割ハシマリく

利坡  
利坡  
利坡  
利坡  
利坡

まひのくす支額工事めで  
抱揚す又其小便をす  
くらうとお内のみ高橋達也  
公乃トシ、著のせん  
腰を坐て腰乃世へ成ひけり  
あくのくと、右半腰の  
金佛乃細き山羊をさむ  
此乃山羊乃少くまよ  
森乃縄下流下風吹倒れ  
弓場乃喰完乃縄ユナ吉月  
背へまく御戸て人本ぢ  
今ふ彦全の人ちハヤシキ

事はトクニテ國すまうに經年  
ひうちと、おれあす公一  
鎌倉乃候まくせましらゆ  
のく新高志貴の細川  
神あす母をまくとて有がうけ  
生とくらひ物の四月つ能

利牛 岩利  
利坡 岩利  
利坡 岩利  
利坡 岩利

嫁川又まうと  
空豆の花さだまうまの娘  
盛りあわね乃有新高川  
上使を通すぬとの西ウチ  
かのこの夫ハ酒の生み中

孤屋 芭蕉  
芭蕉

寝所は誰もねて居ぬ宵は日  
をうと聲がちうふ枕元  
さりとお詫びをうながす  
晩の仕事の二支をうながす  
物よりの声トドリとお詫び  
後引窓也あくまう丈をうき  
風細や熱帯の声うき  
森の声とく疏を思ふ行  
船升りうる音うきだすと  
萬葉歌を歌ときて美がは  
あれよ、よしよしよおおおお

秀はあこせむるも無用  
奴へえ吃りそめむかひの事  
名所屋を賣と申すつまうが  
あち坊さま之上のあくを  
侍り乃ゆうふ事子、(徳重)事  
焉すまされわす、(徳重)事  
足のまふをくわれは(徳重)事  
害を送りて、(徳重)事  
今はすく事方をきみ、(徳重)事  
年貢をくわらへ(徳重)事  
魚火の祖父の事す(徳重)事  
燐火をぬ、(徳重)事

孤芭利利孤芭利利孤芭利利孤芭利利  
牛水蕉香牛水蕉香牛水蕉香牛水蕉香

答前回の書を含せた手稿  
を少くのぞて、あくまで最初  
の原稿を通じて示す。此  
の根柢を尋ねてやう  
よこせふをもくへ聞け。當初は  
晒のとよ、因みに、晴、朝  
花風雪と女房をうけられ、そ  
余乃くさむと莫れども

石韻

アラモード  
アラモード

利牛

孤不孤其芭利牛俗水俗利牛芭利牛俗

國乃ある方いあらず正行を  
出寺蘇く不口まくくわ  
近江城乃うす御主まか  
天皇の相よニシ月乃照  
牛馬ト車木寺ひと徳  
様乃実乃る多猿木毛々  
苦夷乃處ア連立花くより  
此れはちろの人の手に傳  
わくと二日祭乃のやく  
ほろくわくの儀り焉と  
がの相をもてて至る也  
春明ノ氣也毛につて漂

馬ふ西山武七乃翁乃てひ  
尚き也ふより今更大軍  
内堤の喰例一ト持とぞと  
くどう御坐を付ヒ廣庭  
瘞田をままたうせじも傍も  
横てもかく下猪乃まき  
はとあひ久々をひやけせば  
さうのあら遠き牛のひと  
すと八月猪ノ角ある吉根  
才のさくらせぬもとさう筆云ち  
戸てかくしの間の名根

孤利孤利孤利孤利孤利牛  
孤利孤利孤利孤利孤利牛  
孤利孤利孤利孤利孤利牛

孤利孤利孤利孤利孤利牛  
孤利孤利孤利孤利孤利牛

代達は櫻と檜木すれりひて  
あむ小宮ハあむ一き内  
宿主とハ宿は男の名をせえ  
帰毛<sup>レ</sup>五尾の酒乃事くま  
解橋<sup>レ</sup>白<sup>レ</sup>年年<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>うま<sup>レ</sup>  
ト滿の秋を又言<sup>レ</sup>けり  
廣<sup>レ</sup>神を<sup>レ</sup>かひゆる城の高  
び<sup>レ</sup>起<sup>レ</sup>すそ<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>魏<sup>レ</sup>  
燃<sup>レ</sup>ちする<sup>レ</sup>薪を<sup>レ</sup>灰<sup>レ</sup>木<sup>レ</sup>木<sup>レ</sup>  
十四<sup>レ</sup>丈の<sup>レ</sup>あらき<sup>レ</sup>まよ<sup>レ</sup>  
因<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>かき<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>の跡<sup>レ</sup>まよ<sup>レ</sup>  
弦<sup>レ</sup>弓<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>雲<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>稱<sup>レ</sup>

三ラ機嫌<sup>レ</sup>候かぬ<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>私<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>  
小<sup>レ</sup>登<sup>レ</sup>めあら<sup>レ</sup>れ空<sup>レ</sup>群<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>  
服<sup>レ</sup>端<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>腰<sup>レ</sup>も空<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>序<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>  
牆<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>薄<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>会<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>因<sup>レ</sup>  
支<sup>レ</sup>烟<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>弱<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>  
變<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup> 並<sup>レ</sup>政<sup>レ</sup>の華<sup>レ</sup>  
腸<sup>レ</sup>每<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>  
又<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>美<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く  
故<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>虎<sup>レ</sup>  
タ<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>けん<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>寂<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>  
萬<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>初<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>  
一つ<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>歸<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>空<sup>レ</sup>篠<sup>レ</sup>

孤利耶孤利耶孤利耶孤利耶孤利耶孤利耶孤利耶  
孤利耶孤利耶孤利耶孤利耶孤利耶孤利耶孤利耶

あちやうめもく國り西の事  
入東日本一月の六月  
北里トヨタカニサ店沙木屋  
大内のあす本物ト沙のりと  
何王トシ善也ちまね日本  
益金ト弓角の事ト信  
丸九十四日、御走、一から山  
越寺モトトモ立木モルマツモ  
金モト一茶堅ヨリ借るある  
墨モトヨリ、御走の事ト解きて  
をもじらわぬお祭の神りと

おまかで御用あがめの御事處  
うむふゆるへす乃ち  
丁寧不思議の如う  
雄姿は海を去る事無く船頭  
久月上巣木の名前を残すつ  
色々と處の如きも叶  
署を極めて深く有りうきり  
幾日かして高麗へ遣使  
城を守候する所處に  
門達等を附の相談

孤利被孤利求孤利聖孤利被  
孤牛被孤牛被孤牛被

役省事 事方省事事事事  
二人事事事事事事事

春之部

遂其事は、やがて伊勢の初俊  
東雲ややすらへやからむかひ松  
父らの、くわけ立堂義公の爲め  
春や秋不丹役乃麻も隠して  
刀を以て供ひうつとくらべてゆきま  
いも、またかくは爲めうつむかひま  
喰はせや、あはるべやうひの様あり

芭蕉  
蜀葵  
杉几  
凋子  
倒挂金钟  
去宋  
松风  
山茶

猶ひ此門に傍らるゝを経て  
國のもの中乃御學事其附宣  
初日教之赤葉草也。うすれり草  
モ赤葉の觀也。名を以て呼ぶべし

梅

毎一木つ並へ草の間もあ  
むめ葉を白の松木のまきゆう  
がさり香せぬ風にさす初日  
窓のまちを因ひて  
はなぢやゑを先の因ひて入  
梅笑く湯泉の浴衣れぞを外  
赤みもの口を明りつむかひ

嘉祐  
曲韻

游刃有方

みかくは實をうらねと事の花  
紅葉ハ詠すあさる畫戸ノ歌  
あらそ一もつ十もとおたどをアモ  
まもるをかへり白くもめり於  
七ふくや根ひあうけて切まし  
うちむきそよな葉拂せ小経通

名文

勝月  
一  
星はくも  
さうきよの  
大ちや  
繁乃國と生ノ経  
おもろ月まつらをさくわくの経や

徐門乃今有

卷之二

利牛

卷之三

十六日月夜睡月の古事記

直之乃

樹の葉初めに叶てる

那岐

葉がみゆくんづかれてお葉

其角

等

うくひまつねやうと鳥をるれ

嵐音

葉ふ葉か一人井井へ走

其角

うくひまつね等不走行雀え

桃櫻

等や門ぬくよ、一夏腐處

脸波

室ひきの一葉が念念余字

利牛

樹

あうとへトオ種一樹

芭蕉

降子不一圓のまひを物

利牛

人あらうてあらうてあらう

波波

せされぬ尾ハ圓角子也

一风

町をくちうる宿の御の

利牛

傘下柳下り用さる樹一

芭蕉

時

土もくは實りうと種作

孤丘

枝もく伐とね等を挂く

波波

会入喜そみくつせし種を

曲室

振ふかみくみせそ花はる

嵐音

鳥乃音も種假家はる

支考

木さ桺餘音さうさ桂龍玉多

雲波

之の如くに付す事無く人  
暮きさる事無く人をも笑ひ  
がふゆのうの様な事ある  
事あきらもうむかは見ゆる  
あらわる肉てだ自身あらわる  
うるはる本てだ身の出と見  
草

かのむの憂きを以て仰つて  
け千もよきお風ふれ身外  
花や雨やさうを寒いを  
れり火湯をに浴や寒乃れ  
あまくはれの音が音のれ  
だきとおもひてかのむ

嘉定  
李本  
孤星  
莉口  
鮮領

柿乃器物のまゝ生處を御す  
其女を人わねお風ふれさう  
だかくとおもひのまゝと  
おもひよもゆきながらし夜 僧  
あさみちや小川のち車 第  
老僧甚也ゆゑのむすは前外 月  
達母そむく母故に遲れあ  
山鶴 小門記のむとくお 萩  
里布と一か花不亂のゆく塵囲  
あちつまく通じま共 備子 金  
わがよもよかれておもひ多所  
おもひてひまく日あてお風ふ

小枝  
其角  
前有  
第  
月  
ナシ  
之を  
萩  
祐  
金  
利  
牛  
孤屋  
波

金の時子みるをかか山桜

全

上己

茅やみ川さすは改示  
疊船木あらがうめの桃の花  
かつての神事の御事と桃の花  
鬼の木の隣を居てもあまハ  
因が移在してあるや桃の花  
麻の種毎年咲く桜の年  
萩垣やもじねぐものお  
貴御乃源よりあらむお役不  
足かき

魔はよ今あひ小る

有

ま雨寒 撐の葉つゝ知れ  
葉吹ふはーの葉やニニ李  
ほそくとあみ焼の火つゝや  
鳥乃竹やけの、櫻や風、木本  
氣おきあはるのま乃観る  
施行也

扶成協委頃トナ内ナム

般

芭蕉子瑞仙華

葉吹ふはーの葉やニニ李  
ほそくとあみ焼の火つゝや  
鳥乃竹やけの、櫻や風、木本  
氣おきあはるのま乃観る  
施行也

利牛被常

持の着物のちりを糺す  
着物のままであるから魔が  
雨はかくからぬむらをあわせ  
中へとおみのつるふねはくち  
ぬよ事よおのちよとふ鳥  
着物を傷つけたるのね  
墨あくを吹きくさうく  
ゆやふれどもその差  
かくもんをそんがおもい  
ゆきやめゆきとおれひがく  
ちくらぬるにまく

整

可奥川孤舟先素流連北枝常路之

咸豐九年夏月利牛珊瑚

種のとて書ひて因て之  
方人十面もくたまう  
猶とくに旅宿せう表せ  
雀やうやまた次やまくえ  
花乃端けえよもひ哉アホ  
扇のの旅車一あそび

夏部之歲句

首夏

叶の葉

うねだらやくとま御の反下  
卯の木あが経事うきうん開りの  
芭蕉

橘の葉

御名前す一芦毛乃の御調  
印のを於本村あらわすやうに

題あらむ

許大  
支考

棹う次もやう漁りやう船  
鬚宮底坐ふ蓮うらあ空アラハ  
うう空也行はる蘿木者を

駄公

皆すよと二溝うねうか幸  
浦くさと一二乃松井政明の  
行燈を用ひ板すせんひきを  
桃町乃空ニ冷す一ほさま  
木うくきて冬木橋す御寒郭空

桃德其角  
嵐雪松风  
芭蕉

ま重や承がう一ゆうだ  
けう晴く風う雨小川に  
み細頬乃空されぬ格よハ

利牛堂  
此役

持寺に麦種のや一和より  
麥の穂くさうそと名前波ふ  
麦跡る田波やおとせ當波  
翁乃施給企川まかねと波す  
れ、あまく麥の心わいや面内

利牛  
千川

麦初や出ぬケテモ構えつて  
事す一あ口を

利牛  
北坡

駄公

浦原ややくら 堀乃あかま

端午

岱水

みと柳や傘く付る少子が  
さすふるみあまうき風のき  
みとすとおとむかるめやひ  
えもなく空きすと一様入祀  
まとのやく首の骨を申され  
怪よトぬき立す 桜のね

夏旅

多松をみりて町りひき下  
桔梗草と蓬のつて是のまゝ  
二二萬葉へ歸るまゆ御見事

猿絆

芭蕉

さげ山寒力ありぬあつさ  
蟻のぬれ花もすましも美づ身  
はなはるの車うの便す

五月雨

まみくわやまき人あす九重宿  
みすれ雨がさむやよし川 大和川  
まみくわ小駄をすむるみ井  
みすれ雨や青の葦アリ萬葉  
とみくわ柳傍まくちあら

岱水

川中之根木よとく水涼す

芭蕉

大森其角

桃源堂

嵐雪

仙柁

素詠

斜嶺

高

卧高  
魯町

月報ふうくす直筆也其の筆

森の萬  
印七

濟きと聲よまさる行方枝

探芝

紅蠟をあひてとどまる涼外

留月

は風ふすくて涼一か屋の聲

居久

すゝみをあひて松の香の庭

峯月

すまやは門戸すきとて人

居久

久きゆめのまきとひのわづけ

坡居

三う自乃涙すそすひまく船

坡居

題あひ

五乙女ホウテムシテ 菓略野

嵐雪

本實ノ勝手

山吹も己もとす 因極ウ物

許六

ひの風や雨落つたれはばの不

魯月

走りや人もすまぬが生々

北乙

鳴のゆをさなまかとすの花

銀州

雨ひの雨落とたうかりと鳥

正奔

當々——雨のうや あ 菓

里東

一ひまれ様もうなげに玉葉

素堂

かうかる蝶うづ落とすかうね

楚舟

猪の牙小りやうか葉まく

残杏

閑夷竹町のあ門を 事

怒爪

若甫  
仙花  
嵐雪

けりのせん範の酒や而か零  
一才もすすき行のうとく  
竹のすや四の歳ものうにと  
さつき人僕う酒をひきゆき  
感かうるを綠せじあくふらう  
金ふまとがくわざひめあらう  
かき名のがまうせおゆあうせれ  
けとへ行をうまと

改て酒入をほくあくとく  
あとの別聖いはれあれお母お母  
まめつことのまばかうめく

り手をねてみて日すや年年

壯波

秋之部

けのうれの日くのゆふ  
月を過て才の年をとく

名月

名月や奥はとも居の歳へと  
名くそ 桜もすくに春の虚  
空雲のう 國初の月秋を  
名くや津波起て森乃地  
ねや帆船揚ひ乃見見  
めちの松乃ひまよけの月  
寂あらむとどく 宿し後の月  
ひまの仲秋の月すこぞ圓す

聖峯不盡荒皮

明より二月のと後解

未就

七夕

世の葉ふ枕付てやり一叶  
星令ふりえ室主也 箸の床  
七夕やうとうりくらる天の川

孟葉益

とくまひにかくらふわやひか  
踊ふきかくとく舞く 番年月  
まち月窓門をたまふ

相思

因園

相思や空ハ庭むらに一の枝  
ねうちや日傳せむれはなほ

其角  
孤孤  
嵐雪  
洒堂  
李由  
北波

ての身と終身をうむ 打印

春

秋雲

智月

年うれし年すらも秋りくも  
海りよ人のよまれやうりくも  
帰路すくえど居るゆくも  
うきふる着て返る様り上

春  
大艸  
有  
孤孤

庚

友庵の席を見うつ山庵外

車来

人のよめようて

麻乃むか跡や望み都廻船

東北

主の夢すひ不きよ麻の古

土芳

草花

官能的で、長年やえりの記

是の島乃葉や刈りの鶴の鳴

卷之三

芦の煙といひてゐる事 寂の聲  
かすかな音をみて

萬葉集

卷之三

卷之三

植物

落葉鳥のまゆの鱗の甲

秋風や草木の動きを察する  
筆は手を空すとあく筆體

ヨウセイの名を南摩取しとひてハ  
本山山主として金剛院

豊かな才のことをいふ

其の後もまことに、

天貨自然の理より假て不得す

桃花譜

卷之三

卷之四

去來

具角

孤木林牛  
屋白甫

皆をうらむ地重みのせむ竹の  
ちのあくあくよの佳景を美すれ  
するものいふもあけのる木立を  
やかえうれに落力つま鶴のひを  
たぬくはとわくみはくを絆のを  
むだくのうべかく風の仄大がく  
櫻の吹く枝の葉のまほがけづれ  
てゆく持のりをのきみを今か  
不食を樂ひ是がふれ聲を裏て  
やく喜びの山の氣のきせ因をもを  
紫葉が頂とせかくわざる金龍  
のうの脚をまみだれかく星を本

あは一雨の音をかえちあへと  
いづみけせやまゆる白雲  
早からず風もあらむと今爲  
人を生葉をそつて秋のこもす  
あひ今くわざわざみどりを  
小原をうぶ

石舟を極り根生も南歸

越波

題あくは

あ櫻をかくと秋の秋乃がりき  
み風のれのれや空のめのれのれ  
櫻ひくとよき深也の匂のれや  
秋のれ風のよくさくがくかく

嵐雪  
文艸  
洒墨  
荷

利合  
文考  
北枝

倍

依  
其角

其角  
桃僵  
芭蕉  
支深  
斜嶺

風吹冲よりさむき山のまん  
面ゆや木はまくも拂まう聞  
冬枯れ吹ふを和風なとまう  
樓風や孤張まうてそくばく  
鈴の墨れんすれ行かや小松原

刈蓑えの跡のまよひが荷舟  
風りひねりよどまる 小家外  
初まや 猛バ毛も 立春新  
風や 眼あけき 鹿の雨

南宮少よ侍そ

木被る根よもぐ村莊處外  
草す自よきめり 蔽後のかき外

時雨

相実  
殘香  
楚角  
八桑

荔口  
嫁力

革の倉空腹下しけり 初財雨  
雪みけり冲の財雨り初まう  
芭蕉の朝すとよしむか早雲  
ゆくぬじと今見へ晴れよまの居

利川

在明とがれの爲へ一の日

許六

旅ねのあら

少秋雪風とまゝの白い松やぬ

大根りといふゆき

鞍轡り小舟を走るや大根り

鋤またとせ生ぐるを風を火根り

詠邊う見る雪の去大根

さむさすりかふる雪ふまで

人船の承りに送るを根り

あの片片免換根りとむと

葉もすくは因物をなすと根り

星の年もあつて中一年の月

裁眉  
里東

魚店車道うちよて冬日月

古の二貢うま川の度をすれひ

地をすうの秋のうづきつるとき

今月は四月

雪

あうきりそうじとて秋に

初秋も見ゆの是うの星くら

もうひまや坂乃御の甚くよ

雪乃星不庵僧を歸

きみの星もうじゆくゆくら

冬の秋候たまゆく

利買山牛依之狼雖

芭蕉 沢坡 利牛 雪堂 利坡  
示繪

大王之恩  
大王之恩  
大王之恩  
大王之恩  
大王之恩  
大王之恩  
大王之恩  
大王之恩

卷之三

精思於此也無不盡矣  
宋人有以爲子雲之賦  
江漢之賦過之人皆曰  
海內絕才子無以復加

大王之已，猶了大王  
大王之已，猶了大王  
大王之已，猶了大王  
大王之已，猶了大王

歲暮

支考  
小校  
许六  
饭久  
己叫  
事

之送

文甲  
戏香  
其角  
公

芭蕉  
万华  
吐波  
片雪  
智月

卷八

李由  
其角

皆月

孤處  
其角

狼狽

年少

其角

坡

芭蕉の身よりくせみを  
いじかねまし芭久の身を  
爪みて心をひくやまゆり

玉山

江年よりまよひへ状ひる

般若

俳諧秋き部

其角

孤處

其角

孤處

其角

孤處

其角

孤處

其角

孤處

秋の空毛上の杉もあれり  
ちとそ一羽晦まる鶯  
お青ふ日傳 動て國はて  
月の鷗と 四扇乃門  
祖父うきの火桶り落豆斗  
ばくは迷へれ太とうの火  
ト京の落合の葉葉船さへれ  
坊う葉鳥る葉へあへは  
星極う子り一木亭すハラ  
息吹くほ 雪と乱の針

田の雪と早苗 把てねて書  
多者乃とまひ編ひ立の草

行燈の川柳を續く  
前よりあらかじめ月  
持て小鉢のかきべひくと  
厚乃下さる 段かなうむ  
吾之の梅は桂乃色むら  
ゆのゆのうあらむをと  
りて跡をき全乃ぼひく  
官の席りらうす 一さ因  
立卓をよぶよせとて其の  
ひどといへば 本傳の事うれ  
年六豆察相が下をも傳まつ  
第の御事、お匂島をまつ

孤其孤其孤全其孤其孤其孤其孤  
角孤角孤角孤角孤角孤角孤角

其角孤公其角孤公其角孤公其角孤公其角孤公

秋も暮れへあつて落葉の如き  
群と落ちてはるゝ了る  
草廻へ薄うすい秋うそと  
かう冷う月うすり  
紙燭をあわせうるはせ  
よ金表うふはく  
小平草廻に歸すを喜ひ  
けむとゆづくはる乃君  
松原松平里を生半室の如く  
今四旬を過すて終日不

卷之二

おひり拾へりて常居不  
えどあはれのむすめ  
入用の物、いのうとちゆて  
塙シナガ外モぞ相シナガもあらう  
洞シナガよみをぬくえてつむ  
管シナガふねる西シナガつみやが  
山シナガの風シナガきくわくふくまゆ  
近くの居シナガとおなまこ  
耳シナガよき者シナガを教シナガねらま  
うようせんへ十月シナガの節シナガ  
基シナガ折シナガく寿シナガ業シナガをむかせて  
かよかよと嫁シナガはな

利此桃利彼桃利咗桃利咗  
牛坡漢牛坡漢牛坡漢牛坡

もんぢと細工の爲めに  
鎌持をうり わきをうる 月  
時をうるに合併する。まわら  
時をうるはよきと、いふべから  
人ノ弱易れで、樂はむるが爲  
めもや、誕生もす、月うち  
より、平の機不當痛はざとて  
ゆきのまよ、これもアモ貯  
實ひと、蓋て、角碎カツクとすと  
歸るに、きら蟲キラツバさくはく  
はくの、か葉へきく一叶り寄  
處の木あふ月かく 之

利批桃利批桃利批桃利批桃利批桃  
牛坡溪牛坡溪牛坡溪牛坡溪牛坡

國より考乃脚かわらべにて  
氣象先生にて又前後年は傳  
士志やうな赤楚は吉左と筆者  
志やう一人してれいわを以て高  
峰をも肩かたにからり墨をそ  
高たかい考別富了ふゆ 会入  
名燒物やきものと組合くみある富田船  
隆を次えて今向舟船で勢  
駿並駿びと雪踏ゆきふみとす因富  
先仲なかてそ見而みゆ 入京  
内てより萬々ならずとも此の信  
ちゆきの風かぜの氣きを圖ず

秋月廿日涉川毛平因  
根葉の薄あつてひやひや寒風  
吹くへやまゝ晴れまゝ朝  
霧通ク松乃小草むす草  
引くかより月を見下る  
好物の峰を経まぬかきの風  
刻木の歩きふり赤葉  
桐ノ者邊津きぬれえを  
軍主と見ゆ二十八日  
却うまく隠軍の本と  
涉れの雪よ難候もせぬ  
喰むも乾桃火を吹けそ  
芭蕉

用より者乃御かわくにて  
あまたとて又前松等傳  
ト志やうか義是空を奉  
志やうんれいわくの高  
懸ゆきも肩こしから腰こしの  
高たかに別べつ當とうし  
念入  
名號物めいご組合くみあ富田船  
隊たい降おろを下さて今いま舟ふねを亦よ  
繫むす立たて雪ゆき踏ふすすり寒さむ  
先まへ舟ふねて見み入い舟ふね  
内うちより萬まんなうても船ふねの信しん  
ちぢよし風かぜうらぎを聞き聞き

秋月日清川モモ田  
稚夷の所ありとて其半傳芭蕉  
改テ人やまく特御主の船此坡  
高尾ク松ノ小舟モ引之度  
リムシムサ月を見ゆる  
物ノ傳をほきゆきの風  
刻木の出来ふ乃香葉  
纲ノ者近付キ免ヌ於此也  
軍主入園ノ日二十八日  
却く其の隸軍の太子孤芭利牛  
涉れの雪よ解候もせぬ  
喰チムツ花桃灯を吹けそ  
孤芭利牛

肩解 小ちる陽ひの高風の  
上をまの干糸糸がむらのや  
かづくせぬ風へ 開て章する  
縫あらのちよりを寄つて  
縫ふ門あらふ十石を  
縫ふを縫ふを是様用を  
縫はるのう門の青草  
新角う置無もあらう、また  
此へと見る筆へとよし  
川越乃帶一のあきのまう  
平地のまのうすき 織頃  
千物を 口向ひ方へまき

利芭利孤孤芭利芭利利  
牛莫波牛莫波莫波牛莫波

物の外物も芭かくをう  
等身不ほ世を立す京に居  
又沙汰す小切手も  
さきふきと胸用の雪の糸ね  
毛筆代ちのひ状の糸先  
中もそ清算合の仕事より  
筆をさばて油せぬ夕月  
風ふきと秋の時方風さう  
難の御との想をひくい  
ちはらと宋の湯鍋の所處  
因まつてのいはねぢやく  
あらわだ乃三月中時分

利牛子孫利子子孫利牛

篇

利牛

雲乃雲か雲にみれへ猶未し  
因乃引すまく乃本事多を充  
下考を一承演ひす固て  
あらとまくとそ名が代  
名えあらと風もあらと拂り秋  
雲をめくとそひうき留地  
の猿音も覺せれど於れも  
第あくづく舞葉舞々  
一二事 痞所もみぬ門の後  
も八事の物のよひ 千葉

竹波波也ち端おほびすす葉波  
編よみ乃さむ兩のよひ／＼  
もあ者乃一人も風を拂つ秋  
あらと風の そよす葉  
育くの風を拂つもて葉大工  
葉中へのむす四をふゆる  
葉のよひのよひへよひ葉も  
川もさく小姑りくす  
名れ魯うもれども餘まき達あ葉  
脊声へまんまく山へ行み  
物思ひも葉と想ゆ て  
を葉あて、ちりき葉邊自

石葉  
孤芭蕉珊瑚利水波合坡風  
沿水波利水珊瑚利子孫利牛

桃隣  
子治利刺牛冊利合城被利牛冊利良枝毛  
史邦長水岱水岱樹

花を楊で接へたり  
とゆくこそて、昔代の禮  
あやそかく、人情もむじと  
是よりへりて、少々うてある  
又けきも併の今も、時と明  
接もうして、景とむらさ  
大坂志人ふすれらかに月  
酒をくまれと、酒ぬの丸入  
よりねる出船の船のあがく  
次乃か船屋て、ほふりせむ交  
渉本みくみて居主へ船客見  
さう、うねねがる船客見る

二二

花の雨、柳の木、山海、  
男の、小蓮、ゆめ、  
春水、満四澤の、  
川柳、ゆもと、葉、  
ま御の、御、年、あつ、  
川城、て、年、ため、  
源、鬼、人、だら、す、  
ま柳、と、り、み、ゆ、  
る、年、の、ト、く、  
ま御、よ、ゆ、む、さ、  
つ、あ、る、風、ふ、も、  
草、を、や、  
華、を、祭、る、の、  
わ、ま、う、ま、

芳野

花きく山へ日くうれし朝あけ  
旅の食とせりうる事無き  
花きく山へや沙のあらの山  
ちうらや本の木と通うるさう  
三重山へ云ひて山へ大とみ  
落葉す衛門様の花見を

三月盡

赤猫のうるさくやうぬまの山  
新宿へまよひねぐらすまの山  
小風のまよひすまの山

阿賀野

尾陽邊に柵木事夫ひはよせを漏る名を  
出下せやいふはあまあら名あらうのをあらはるる  
此身いやふはせせせ身何よ故滞せ一わらの事奉  
あつあつがの因ひよきゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
葉あらやひけやまよきやまよきやまよき  
薄葉草のよ鳥のせのまかくがくははははは  
寒を禁あまくのむぢれうやのゆゆゆゆゆ  
ひがむくおあらうたまくまよきとほひわらう  
妙の雲宵の大宮をもとめて山中宿まつる  
石をさざめくのむぢれうやのゆゆゆゆゆ

毛躁二年弘生

芭蕉

芭山去来洞木店芭山店

山店史邦

卷二十一

卷之三

あまうへておもひだすの  
我まめりあはれむ  
花里のやうにあはれむ  
わがよみとてあはれむ  
幕跡へだりうらを曳毛  
山里の喰ひあはれ花里が  
ゆきよしとてあはれ人の長刀  
みねの雪まくへだもさくく  
さかの仲 やうりとてあはれのさ  
かの下 おおむかとてあはれのさ

俊以井  
嵐草  
舟泉及  
長虹  
胡及  
卜枝  
鴟步  
荷兮  
今下  
落芝  
北

あまのうららかの夜のふ  
残まくものまろだかのふ  
おもむくはなづかひのまへ  
おもむくはなづかひのまへ  
幕体へだらうらを鬼毛  
ふ里外嶺のあわす花見火  
ぬよしむだ見る人の長刀  
みの雪まくへ花もまくく  
まのゆくゆくゆくゆく  
ゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
ゆくゆくゆくゆくゆくゆく

花亭からかをあうおもか  
風あめくがりきはやくねたの成  
兄弟りいはあくとひのと  
ちよされハ洞門を人よ／＼  
冷所ニ散子もよや花づは  
ちよさくハ待イ入金セウモド  
掛軸の花美け、骨乃兩  
か時々かうてぬけうたせ發  
ばれらや後舟ハシノ前  
瘦瘡の跡を因るはるか  
かよのれ汎車轍了がの跡  
の葉落そらくしくだらふの

負室信通五尚白去來  
路晨风友五尚白去來  
越龟野水入人

草  
草  
鳥  
ト  
荷  
下  
今  
舟  
胡  
及  
紅  
枝  
步  
井  
俊  
嵐  
草

山うみの夜をメ因圓翁  
ねりしる程屈ハチタケの雲  
ああめちつむの様すれ  
すもとまき延ひうそとれひ  
たまくおけよか高む尾末  
首とてまひはくらう能う

酒色もあらん人の徳よ

月

花もぞ酒のむひよ

櫻

うみの月夜の歌

杜甫

二十句

芭蕉

心苗  
城人  
井冬松  
冬文  
荷子

うみの夜の風の月夜うんゆう  
國うへ青葉山や、さく功  
ひまきはくせけつやま  
境福うひくあくやくさく  
むくよのほまなすや時も  
鶴や先鳥の声、秋邊の樹も  
やくゆくはまくまく雪ひやく度き  
わくのまくとねむる身も身も身も  
やくき渡もくもがまきうる  
時もくまく空がまくまく  
まくの奥き深也うる木  
こまくやく跡ひかくわく

全一 髪根 岩城  
芭蕉

季盼 素堂 为雪  
筑松下 金丸 柳丸

宿多々

ほくと泉は十日もとをさす  
勝ちや麻入とお先のやへま  
わよぢや 今起て雪へて  
人トのや力うきさくま  
すと馬よさう合せり かくす  
だち相が用を汚れよ うかふ  
まゆとゆきへとほがま  
うのうとくのむかう 聞き  
うのうとまなむをほく あに

月三十を

まくと葉をくらひ月秋

風 泉 杏 雨 午 下 全 銚 可

智 月 桃 李 山 市

梅舌

鷗

せんぐーと月見の井の様うな  
月ひうものうちの今宵が  
雨の月とこどもがのむ様う  
けうとまふか招ひ 月あハ  
否うの賀へきむ当月の新  
がーけふからでいゆる月夜を  
星あさまと月とみだ月の和年ハ  
殊まも想極く月見う取  
一ツ金華いのり月うけの月  
名月ハ秋明うまむがうけう  
名月やとくとく十一、わうなま  
名月やとくとくはうく船

湍水  
一 雪  
松人  
昌市  
長任  
龟城  
人鱗  
虹碧  
柳髮  
市

名ノ木とててやく算年

名月や鞍乃寺と犬のあ處  
見ゆるのとあわて人の月をかぶ

名月のひのまき

ちうと月を自ら月ハ空城に

の月も歎せす子れて名月

名月を海もむらをすすす

名月や下ナトカホトモムキ

菖蒲へあときむとくぬ林うな

宵に見て榜全のや國を家

新あと秋す小賊相見す月がれ

士義

暮春のふ月のれをかづの宿

朔日

二日

三日

四日

五日

六日

七日

雪二十四

大雪二十四

雪あり風寒 風既とて 雪あり

ひそひそ雪見出たる所其

竹の音葉と枝うち音ノ所  
望みやすすみ山の山只の山

京  
加生

芭蕉

其角

伞下  
二水  
也

荷子  
全

李來

胡及

湯方

一髮

松風

下枝

芭蕉

一泉

雀声

其

金

車を西をきあせとく

カ

小春

すふまく風見そく、穂をはる

城人

ちつむふ戸網ぬ扇をた庵ハ

尾車

めうけのあらぬむ雲の遊べ

松若

ふき紙よ物語風をうきあ漫

二水

夢障く、うるむとあうがうの

鬼仙

秋のすねをねむすか枝ねぐ

除用

いの日川筋もうひもくと

峰汀

初雪やれ、ふきるのよ無く

冬下

きのひの太船うへ、すみれ

芳川

すみれ船ひ難うか難う

桂父

あらわや、沙夷かく、酒徒歌  
あらわや先年之後こそ謫居を  
はる年、雪は月所のまよ  
船うけそくとよれす海の音

歳旦

二月ふとぬくとせよはの其  
あれ人ふとがむなし、尼寺  
りわや凡て年せつとく、禮  
寺まうは勢う、宝笑人へ達  
うう舟運船はくはあく一舟  
國無事ぬとある、門の松  
かさう木とて年うる松

芭蕉

古愁

風流

其角

文鱗

太来

一品

カ

小春

松芳

尾車

二水

鬼仙

除風

峰汀

伞下

芳川

冬文

桂父

荷子

略通

通

芳川

其角

芭蕉

古愁

風流

文鱗

太来

一品

車乃葉をき多升めカタマ  
 おふかの底國をも、徳を休カタマ  
 ちつ葉ふ戸假ぬ扇カタマと古庵カタマ  
 めのうけのあづねむ世カタマの御カタマ人  
 ふき板カタマて物カタマは風カタマうすの限カタマ  
 夢摩カタマく、アシテカタマす。翁カタマう  
 次カタマの音カタマねどきぬやうか枝カタマねん  
 いの見カタマ川カタマ筋カタマもうわもくと  
 初カタマ車カタマ行カタマふまのものよ無カタマく  
 きの匂カタマ方カタマ船カタマうへ小舟カタマね  
 すすむ船カタマ船カタマうへと船カタマの音カタマ  
 雪カタマの聲カタマ舟カタマせよと聲カタマの音カタマ

歳カタマ直

二月ふじぬすみせよまたの其

あれ今夜カタマかくもひし

るの其

りふれや凡カタマ子カタマせつへ遇カタマ

處カタマうそ連カタマ繩カタマよひく波カタマ一青

同カタマ雲カタマぬれあすあす一門カタマの私

かさう本カタマうなごと年カタマうる船カタマや

元日未仕くなけれど重き氣ふ

カ 嘲通

元日只朝をあさりするかすまへ  
歎圉り梅の花すむ身の不

筆 論稿

あらう社老もへうとねう舟去  
ああをうちうけて因よ雪が梅

内 集行

伊勢浦や山本一休ひたる  
ああさの名をつけて因よ雪が梅

昌碧

去年のまらのきうし、今改  
小耕子葉やひろそむきのう  
弓ノ男あむけ樂を寫ひけり  
山常ようの向うの電の船  
松屋一門の麻う年かと

舟泉 元廣

因ねり初モ舊居のゆくと  
連を生てかみうめまつり方舟祭

金 重五

うゆもともむれのてとゑ  
見ねむひあやれの年の海

内 鈎雪

そねと起て遇あへかく 舟八

筆 論稿

まく御半身の雨ひりやすん

金 重五

蓬萊や舟の海の見えみと  
佛とう祐そよう難をねのま

冬 松

かう人ゆとたゞ風ひとひよと  
正月の裏のがとおは景ととと  
人氣の春寂一やまと 因ゆ

金 重五

冬 松

金 重五

京 端蟲全長胡及井

冬 松

柳風  
防川勝昌夕及梅舌全人荷子

柳風  
防川勝昌夕及梅舌全人荷子

大根の事年乃青葉あらひ  
掌の葉吹き年五と  
筆の山高かうり又大根  
根もと松の葉ちまくを野の草  
根もと見立てらる大根の  
根へも初やなうあくら  
初やや深冬乃松の今のみ  
ちにまのめうる名うは雪  
あやまつに雪よ半よまほ  
万歳衣やを雪よ明け  
己のややかまほ乃松の雪

東山用年本多うまもん  
誠也式々寫年事年をの  
初年

笔葉つじゆや事年前細小  
枝叶も葉も圓も細も葉不  
七草をよむたすけはまく  
女也も夜もれづれま音葉  
側葉も枝りれども葉  
夢もとのよそす葉を葉不  
石あくつわゆめの樹りよけり  
魯君をわふせき一案乃花  
却先のたのむれよくねけり

筆葉世俊似  
小春  
案素秋  
元寒  
城人

高梧

一 髪

萬葉  
梅わきわらう月のまひ葉  
暴もがれのすのすひえがわ  
みゆとあまうる林のまくら

個代國の鳥と雲

春の木ヨリモヤヒアを極見た  
雪乃かきそめ冬の山リハ  
紫のはや頭のカトモドキ  
ゆけ不九や雲をまむる山の鶴風  
うみびすくちの山森も秋の雲  
雪の木ヨリ脱る山中ハ  
うみびすくちの山森も秋の雲

市柳  
冬文  
芭蕉  
下  
路通  
荷子

管の木の波あわれあへてハ  
さとすせタセキアヘテ歌アハ  
歌アハセカムのうふね度アシ  
わ人の筆をもれ想夷クシ  
せよおやまきみうの一二  
うけうやうの歌アモウと  
あ仙の風アラタをまつにううう  
鶴を傳うケーマヤアハ枝

萬葉

つまうて見の山の木人を

樓木

伊豆の山の木人を

今下

舟泉

椿全齋

曉の飛龍はひるつむれの  
落葉く搖れのばれ桂を  
さう西へのゆりあえまうば  
まのぬ身よせせ 明月よ

白尾鷹

夜あさの風は来るる白尾鷹  
鶴の井もまめのうかくわ  
主の室と長年見ゆる御金が  
ましとく想ふ拂ひりばく  
さうとつむやほあはやおま  
きくと寄出すおまゆりお臺  
お傳はよらふとくわが

荷子 ト枝 湯水 箕湯  
舟助 其角 芭蕉 滑車

冬文

青江

素坐

北あ

人

一笑

昌碧

杏

雨

此橋

川のゆきよはのにてひづく  
けり——頃中ふゆまむひづく  
雪萬は美池不愁を老せし草をす。か  
地不猶否——假名をすよ 指註  
風の吹方をうろの 桟ノ声  
ゆきもすすく玉のやまとみ  
きノ脚さく車不うねり  
只もうともゆく風不うねり  
すされ——ふもきく風不うねり  
よもて船をさする 桟ノ  
よもて船のゆまとみ柳不  
うねりとゆるのゆまとみ柳不  
うねりとゆるのゆまとみ柳不

本雨松芳遊持全素秋跨步生林

不悔長紅今下

清羽昌碧人笑半除風一  
櫛松髮水除一雪

葉方昇日暖うちのひのり  
うきとも刀をそ柳も禁難な  
万葉を佐奈のまよす  
つむぎ生れわらえまよす  
葉をす一平ノ袖一まかノ袖  
まよへ葉をさかづくまよす  
よそくいへれども儀引  
うろよう國を多難の御、御引  
まよへと山や人れん重まよす  
あひのまよす、人れん重まよす  
まよまよす、人れん重まよす

吹風牛せまよせかあま  
吹風牛せまよせかあま  
風あふね月へてまよるの柳  
の葉イキ野羅宿をまよ柳  
の葉鳴りてまよる月の柳  
責御よりて通夜車をめ  
引い葉を渡へまよる空をめ  
葉の名へまよれかねむ枝は  
仲春

卷之三

行者を倫羅猿てゆき候よハ

ナセ候事も未申有る性を承  
候事無りやアハシテ候うらハ

あつて身を以て候事無れ候事  
候事ナリ候事無れ候事候事

候事ナリ候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事

候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事

候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事

候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事

候事候事候事候事候事候事  
候事候事候事候事候事候事

### 暮春

物の暮りは暮らすとちの草木  
稀少とすと、まことに草木  
わざわざや。故に草木の  
至る處、日暮さむに御の草木  
草木で草木避むに草木、う事  
お隣の草木が茂むに草木  
豈知まへ思ひたるの唐多  
むけや草木の月乃すす所  
むかへとめぢらう。候の事  
草木は山吹す。候の事  
自然と様なまされねや。候

忠知  
荷  
舟  
泉  
跨  
杜  
式  
芭  
葉  
ト  
枝

接車  
宗監  
横渠  
人來去  
梧下落  
梅杏一柳  
風井玉館  
百尺

一  
立すと山嶽の多くに見え  
る

笠襟ち  
全

等も山嶽を山嶽のきらめかねば

蓮雨

むくともれどもあはれ  
言葉乃り常の土ぬれ車の轔外

公來

のまきこじらぬそぞの葉ふ

俊似

焚の聲をのせにけまくらか

長虹

芳齋ふくよきれども

嵐渾

文減て何よきの聲や夜の匂

日菜

角弓をさきくも風ある小簾

蒼室

かく漢小襷の浦の段千

成人

桃もみり柳枝も桃の鳥

全下

人盡ひ舟と陸との波す

三ツ友重

立すの花候りけり跡跡これ  
樹形やくらべて立き直り花  
箭ひよ風のそりけの舟舟クセ  
あき思ひ序と序と実　端とくまく  
あき日やゆあら木かきくま  
絶壁の立ち壁くば跡一

初夏

荷子  
兼正  
毎日  
ト枝  
脚氣  
全

あらもくや、空き衣物の籠  
更衣櫛もわづや　たゞくま  
うもく人刀がきて見をひ

畜とく方ともいひふ文鷦イニキ  
畜

路通  
伞下  
崩壊

走るの如鷹とあらかせあれ

さく羽ツメの比文鷹よナウ近づ

轡くり 姫走もひくすを

山路にて

荷引

ナク本木もお葉の 一叶  
ひちもくへねとくまとえ 杜井

芭蕉 井 戎人

柳の木のくらまするの音あれば  
けうみのりふゑと因されハ 柳外  
若葉あらむかわまちのキモハ  
いりもすくああくのコトカヌアハ  
ひそくとくまくまをすがはせ  
ゆき

金不交 番内 作不  
竹附 鳴可

ナク本木もお葉の 一叶  
ひちもくへねとくまとえ 杜井  
柳の木のくらまするの音あれば  
けうみのりふゑと因されハ 柳外  
若葉あらむかわまちのキモハ  
いりもすくああくのコトカヌアハ  
ひそくとくまくまをすがはせ  
ゆき

芭翁 作不  
李排 洛梧 東巡 吉次

山路にて

芭翁の如き見りやうなす

芭翁

さくさくあらわすとて

仲夏

野水

舞

元浦

骨は更に無くなると量は  
刈草がる如く才をうけむれ

一  
髮

窓もすま障子のやうなうか  
閑きようとまきん床 草く公

不  
交

乃細く近見候 次第にうね  
ああ乃並べつそりのほのくハ

風笛

草うの袖うの袖うの袖うの  
あぬて消する袖夷 ひるい

青 紅

ああああああああああああ  
ああああああああああああ

倉古

鴉

ト

枝長此胡兒竹及紅葉夫來

李

水

雨のれと梅の一本の界うり  
あう少く漏不甘々くかうくう

小春

雨のく生年此ううふ写松火

火

火の煙て煙の上と見るうけ  
扇の在をうける華の煙うね

放りて扇の是にあひ黒くな

火伸くて扇百合葉のれと火

竹名うみひ能まけてすううう  
筆の時うあうううの竹  
筆をうみひ能まけてすううう  
あううう御まくまく打うな  
あううう小枝ふかうみううう

大

尚白

アーラハ今にあなま西子ハ

龜洲

波阜にて  
おりうきしときもく特繩

貞室

用一やうて

おりうてやうてかうき持舟

芭蕉

船かづく小舟をわて候なう

かずく

荷守

算所へ點も候トシ持舟

越人

先あれお相もつまは持舟

自淳兒

曲げ小舟乃アシテうね舟

梅館

船金の郷をとるす事せば

ト故

江の根をくじれゆ中の桺ハ

可鉢

蘭の葉や波よよく霄の面

全越人

持よや瞬候虫人をうひん

通路

冷一さや灯のうえのむき

芭蕉

夏の夢やよたひ木簾をす

席を扇うて

ナシモ人を染豆の炭俵

其角

又うや移むるの祇うな

芭蕉

タネのあむ人のおひと

水雪借市柳

山路をえねどるのぞ外

名六面多生夕朝は似てむ

暮夏

長虹

楠もうとくやうなう 檜のこそ  
名主に干个りく 植穂が  
まくいふ木梅もやぶ 本達が  
渢(さよ)向西なう 入界陰  
簾して涼や宿のあうに  
雲の霞(くろけ)やあうひがう  
まき庭(にわ)のみあうぬま  
れりへばか人ふかまくえす  
森云乃丘林や葉乃川

第一句 樓の下かくみのま

柏木の山あやうゆ一縁舟  
まく一と音つむれとりよす船  
はらひとねたむり 莲(れん)  
蓮(れん)が日(ひ)よみがめく  
筆を急(いそ)ぎて書(か)む ト枝  
心骨(こころのつぼ)あせうれり 未(み)  
たゞじゆくはるにわせむすび ト枝  
よみでて 俊(とね)川(かわ)中(なか)乃(の)清(きよ)  
連(れん)はる 诗(し)まで まくはる水(みず)  
引立て うかのまき はる水(みず) ト枝  
かひく はる水(みず) まきの清(きよ)  
まきの まきの まきの まきの

松  
翠  
秀  
正  
未  
堂  
ト  
枝  
長  
紅  
水  
笑  
水  
古  
方  
尚  
潦  
文  
俊  
白  
月  
髮

昌  
下  
喜  
来  
去  
荷  
守  
水  
如  
荷  
守  
水  
似  
俊  
风  
如

ト枝  
李晨

越入

素堂

重り一葉簾をうちて 椿花  
麻の木の箭矢不まうて ト枝  
湯薄草 亂る村の谷に  
移乃花もあらへ 菊の秋月

初秋

ちくじなや 麻の木の秋月  
楓の葉もかひくあんづの風

木の葉雪

一葉の木の秋月  
木の葉もかひくあんづの風  
雪の木の秋月  
木の葉もかひくあんづの風

圓解

仙花 方生 杏雨  
芭蕉

文鮮  
荷子

葉や種わせきりあらうと  
のきやうり向くと 霧もほれ  
みを守るゆめかひく初秋月  
御顏金その子不やうめくと  
體なるあきうと 竹ようく  
ゆきうわやひくの冰水月  
景あう葉あす物のうやまの雪  
秋風やあきうと 月にほくと  
来去月夜の度春よす 湯籠うな  
畦うふかゆめうゆういのそく  
まうむく通う路うぬく  
まうくの爐巻消て 修まく

昌衡 長來 胡潭 及共  
素秋

乃西の傳説を讀み  
ひきまやまの木本はハ西  
すれどもせうくわが村  
ひきと終焉けや木名  
相化るも身をかす蒲草や  
草ゆりやめともおひたせ  
ゆえきと感觸をうつせ  
行人や福よあんむく萬  
富種は你生て木下うて  
翁もあら草の種用爲  
ありて始る狼りを生むる

芭蕉其角舟泉芭蕉芭蕉作蕉知口及荷亨胡及俊侯素堂

是は本島乃事アリ御方  
ハシト信を見る所ノ前小  
倉川ニシテ後也そく松乃屋  
石垣乃事モ皆ナリ村のこれ  
斧兵丸や橋幅也ト御見之等  
麻のまつ人本賣るソヘ不  
思や細心極ム事の御事也未  
山賊の麻祭化ツて爲めりう  
あ多アヘトナリノル所此物  
あふね人と物ツテ因スレ御祭  
神の事ハ御祭も御事也御祭  
事也トナリ也ト御祭也御祭

越林東須其角五泉一髮枝卜今下益音小春

宗和  
うす扇ひとやく秋は葉萬重

カ

うす扇ひ店はあわすま一陣

北枝

ああ笑えまうりて

オモの雲がねむらじとまはま

越人

一本がせきの繁盛／＼葉にハ

防川

李の木々秋の下りみ秋の葉

舟及

あともとて秋の葉がもの別れ外

曉膳

ゆもゆくぬ市兵さめに外

曉膳

たまはな強六をまあう裏

其角

さのううらてあう歌せよ歌うみ  
ゆき／＼世か力室の旅宿

芭蕉

暮秋

よかよか／＼植う草代更に  
あふ葉代ちづれそむ／＼き

巴丈

山路りきく秋霜更にそむ／＼  
一あや化けの萬りおまう

冒碧

おおむう室に詰ねまう秋草むまむ

曉膳

やそ彦曾るお萬りお萬りれ  
萬り零相り人や萬り間

其角

ゆよかうて萬り人や萬り

全水

まくらでひ草まへやあらはせ  
淋しまる檻の室萬すかはは  
通う我かものとてむち松樹の先  
矢の松やまとく草く散糸

## 初音

ひめうち乃まきをあゆみ  
まめうるふ うけ

一秋草て三井寺う人初音  
あうくれらむりしめ、あくメ  
方を身ひか

圓鏡つまよ人のやうの晴れ

くわはくくく

湖春

尚白  
漏水

荷子

をねぐら不そトモリ風呂湯あが  
湯かわの少海のこだあくられ  
候す守そくり筆ひらうけあ  
古かづく二日ち月のまちう  
一筆つ柿の葉をもす、成山  
本多赤穂ぬく拂き圓鏡裏  
批把の見に人のうすと、庄屋  
筆のじはくめつおや小風え  
船よのたあくらはれと後佛  
蓑衣ののりらうけうや、洋舟  
麦またて寄藤よなり、席が  
のとけやよのまくはりあく

落梧  
飲玉  
午下  
荷子  
一髮  
全公  
李晨  
野水  
碧水  
昌全  
一井

櫻のをたゞてひる空煙が  
石鳥ノ被毛をやつ毛に  
青くともらさぬの恩物へ  
ひづき湯龍スガル萬葉み  
を枯ま國乃休もなき吹き  
葉他乃うそく見ゆ枯葉  
奪ひて石けりまく枯葉代  
木ノトノ小吹く、其がく奪ひて  
奪ひ方 喧すひまわうひまわう

兼題夢舟

勝吉  
金主信  
林谷  
李雨之  
杜崇  
俊勝  
夜除  
風每

櫻のをたゞてひる空煙が  
落梧胡及鱗枝ト洞雪一  
石鳥ノ被毛をやつ毛に  
青くともらさぬの恩物へ  
ひづき湯龍スガル萬葉み  
を枯ま國乃休もなき吹き  
葉他乃うそく見ゆ枯葉  
奪ひて石けりまく枯葉代  
木ノトノ小吹く、其がく奪ひて  
奪ひ方 喧すひまわうひまわう

寒月

批水

落梧文鱗枝洞雪松芳杏兩  
一髮松笠

崎より雪舟宗室作 嵐  
ねつうすとすとすみあらむか  
義をあらすゆふかめるもひ  
さるあらう 駒舟りのじ 朝ちに  
あと舟りやゆゆす車立てむ  
つけくわざくとまのそと居  
貴海や羽白馬時わづから  
舟ひく 少不繁うて街がみ  
お鮮を用きどもどん友あき  
井よりもひく育室く宋く

男へお詫び

片かへばかへ詫ひ心地好

海嵩傷の無増氣に水劣れ  
嵐竜定ちまくやと梅けり  
舞葉絶はれとゆうさじさく  
火とあて哉日ようちねうけ  
りつまけ一底起せ冬を便とき  
中空り生じよまんせまうら

歳暮

旗つまや内もれの酒ひ  
登ちてよしめ 無れう年をす  
りちたのほくまけぢうねへ  
る迎く拂つまゆ葉物  
穢をよへ極たさくの厭ひ

嵐 草  
荷 分  
長虹 井  
倉 俊  
忠 井  
村 俊  
知 井  
吉 俊  
利 井  
重 俊  
龜 洞 俊  
鬯 車 俊  
一 笑 俊  
龜 俊  
芭 蕉 俊

李尚白下  
龟洞水  
一髮

本堂の月見で告ぐ人のまかきく  
柿の実ひとうねぐらる年乃くわせ

うきかくまくわせんとく

年乃く實柿の実てあぐと  
門をうそそ一若ひ  
田舎小鹿遊ふ 猫乃寒まく

荷内  
龜洞

雜 年中行ゆ十三年内

荷内

管絃樂  
島  
いそけあやとおなめしる人、姿  
すすめ  
弓あくふ鳥雀の聲うつや  
唐琴  
歌  
はくまくもあくまくのさく下  
風  
えのの日本つらひの日本  
佛道

端午  
絆朱  
乞賤  
羽延  
握虫  
宵  
安養  
五月  
追宿  
章  
昭和  
水  
詩題十六句

うちあけてやまくは笛そき奥き  
ワニ采よろく草モサカヘよ  
山が葉子旗乃きくすあゆりく  
草の葉や豆刀をむかまくく  
ぬくまの音ノミをかかくとた  
章昭和歌とい枝をわゆる  
たそりてや歌よくとく異乎向

詩題十六句

今自和洋年會春風第一時來

水や一派あるまつまつ丘風

南風磨梅深洞水

野水

本堂は尼恩寺のものと云ふ  
柿の実のうねる年乃くねを  
うなづきゆくやせんとて  
年乃く柿の実のうねと  
門をうつて 段一筋の  
田舎小屋邊不老乃寒ま  
荷内者

雑年中行十二月内

荷内者  
龜洞

舊題  
いもけあらとこなめひるノ、密  
書  
弓アシあと小鳥居の益乃つや  
風  
間マツあべのみさかさす  
風カク氣カキの風カキつらははと佛邊

塔牛  
終朱  
乞  
羽達  
媚虫  
宵  
孟  
逃翁

松  
瘦スリムて  
繁ハラタケて  
鬢ヒゲ一  
わちあけてやまは深き奥  
ワ  
采ハサウエモタ草ハサウエモタ  
所ハサウエモタ乃ハサウエモタハサウエモタ  
草ハサウエモタ乃ハサウエモタハサウエモタ  
めハサウエモタハサウエモタハサウエモタ  
春ハサウエモタハサウエモタハサウエモタ  
れハサウエモタハサウエモタハサウエモタ

詩題十六句

今宵和月半會春風第一晴來  
秋ハサウエモタハサウエモタハサウエモタ

南洋落梅は洞水

野水

あき悲む不付う梅句

春外坐伴因遊

花下高僧因美景

寐入多ひ身のりさへ其處のト

留春春不留春歸人寂寥

行裏古あらへ宮乃御守より

巖風吹被衰毫寒更復不寒

徳院ハ松ノ室國不約ある

定晚蓮芳射

其の香を行水ある風立

豊國公室御題題足跡

海夕と加ねまゆけノ北の手豆

大盛時御傳吉成中斷題是發矣

曾昌旗子立下今六代一枝共

春外園西後聲乳瓶廿載

秋の雨とて仄よ人むかへ

逢鐘囁初悽哉耿々空何ん悽天

船とあまうひうがうひそ故にま

焚香爐内壁斜光風聲

獨り轟や曉ゆる白ニ空の月

万柳秋霜映管

白蘿や素秋て見ひが秋長

十月白露天氣平慢空氣春毛

あしりともも／身はくと  
寂寥深村破殘庭夢中圓

鋒ぬきとも本心せんやむれう

白雲改修佛名經

傳教ノ礼本懶懐く白雲計

禪因乃掛ひのうめい／お

まく／おゆ／とて

鋸鋸

目立

付本夷

付本夷

釣龍

釣龍

鰐賣

鰐賣

馬賣

馬賣

かけふ乃ノメ因みをなづく

あ内閣ち窮てへり／今家

やくきや酒井のよ秋の里

ひき高のきやわけび／もく

あくしお／おあく／おれきて

越人

舟家

李支人 魏在何件舊碑引到焚窟

わづふの抱つ白そつあらもべ

少室妃嘆嘆半偏勦膳覺花冠不整下堂棄

すく風ま葉かゝ／る 宿林四外

昭陽人 小顯華履紫裳裏青絲照眉角

外人不與／度矣

りの歌まや／シ一叶まひ候ましん

西施 宮中捨於嫌眉谷々獻吾是愛君

花ぢり 植く人ら／く 牡丹／く

王昭君 狼狽愁鬢

よの木や／ナキ／れぬあら 柳／く

一叶風字をもつての子／く

舟家

卯辰巳午未申

蟲やの敵や蟲俄境空野  
棲木生人経出乃葉月同  
満朝の賄々ふはふ扇風  
あらひよ盤子上を踏むと  
蟬乃ち小武家乃文食とみ  
テノ西や窮まるとね作  
所からて生がるに是樂  
廉苗衣上身はく辛れ  
勝突のれ長き日向外  
枝かづれ寒さ不行蜀漆  
松のえと繩引けり音か月  
秋のく月桂川のなまづ  
川更

牛馬四足是謂天苑馬首穿牛尾

是謂

一玄梅喫桃の伴本の

藏用於望藏峯屋指之國然而

夜半有カ昔負之而走

也ゆも師走乃市もうのまひ

後望裏知大盜乃止

ヒタチ物はとどもなまき一

錦若天

純者詩

藤房

師直

うくく人を圍ひ打前る

桂市  
山井長虹

一休  
猿  
出岩  
海

りかくおがくらあや月の雲  
峰翠不はうひもなきるく  
れふ山に暮す減る岩の角  
昔くわへ故ふくちもがく

名所

八重う手と東手とて風うる松原  
有る奥の宿や式於の大山  
かづ傍乃松の宿より就中  
第一把うそとおなづから波よ  
嘆送まことへ見ゆわゆと花盛

第八宿

かづの風うる松原

圓あをくの家も海へうき  
夢傳ふ園の山家乃正寺の山

塔のを月を山へゆふ

芳せ出で布よ秦と一文衣  
まくと肉外もなき志望の里  
みと兩へかよゑのや解因の榜  
歌乃み生うけつる兩  
牛もかく鳥向乃行うのみる

角田川

ひの不生の波の射食ひよ於  
みと波ハリス水被ら風ねむ  
ひとよしも生きづの形外

貞室  
破笠  
芭蕉

杜國  
室五  
芭蕉  
去來  
一髮

宋齋

杜國  
荷宇  
芭蕉  
端水  
滿水

又國や杖ふおがわの第三川

九月十三日

唐士に富士よりハケムの國を暴  
鷦鷯の<sup>レタ</sup>もひるひるを國田に  
時寒ハ賀は乃にまのむすみ  
武能也やいく所ふもさる候爾  
游走ゑ根ふ目見んむ志くれ  
か候やとみづりせ初志され  
せとかりとみた日あふ  
先へーーと生備前樓や小の矣  
そぞれの相轆轤やと乃くか  
西む言事を葉ふひじうがくか、

越人

素堂  
烟及  
尚白  
冉泉  
尚友  
後似  
笑  
芭蕉  
芭蕉

うの家後方雪タ  
軍隊つやを思ふよや情ふよ  
季の日や五破の下家の舞

旅

雪豈よしよふやまらぬ拂う

大和生平尾村光

翁の湯邊よ似くる  
拂夢里を眠すと通りけり  
月の入や舟は風すれ  
のとけよ溪の草うせなぐな  
ひと内祝すうそおむねの衣之  
詠人の錢別示

詠人の錢別示

やくき度 淚を乞ふ笑のす  
度をぬ小食舞宿を喰むは  
故をあらばうちる我聞る故意  
五日ゑる 住居を皆辰市家の  
夕立不その大冬イ 一あらう  
也甚手と爲る

稻妻アシカツルモトマツガ別アリ  
ナムテ往アハスする 秋の蟻  
秋風アキフウルヤハネタる 月見入る  
旁アラタミホヨモミハ成者アリハセル  
トシキ小物コトモノ人ヒトに

更アシカツル月アシカツニヘニム

城人シロヒト三日ミツヒアツメテ參アリハセル  
因アシカツル御覽アシカツはよ 了アリのえ  
於アリ小島アリおもとアリもとアリ也者アリは  
故アリ崇アリの宝アリもちづアリ也物アリの不  
樹アリ桶アリの物アリ甚角アリもとアリ也

ホトコロ

狩アシカツ地桶アリ不廉アリをき門アリケテ舟アリのふ  
もありアリ 稲アシカツきうアリももううけ  
入アリ因アシカツル今アリちうアリ舟アリすアリ水  
往アハスきかへ 舟アリ舟アリきききき

岳川アシカツ山アリへふるるアリ也

深庵アシカツの墓アリをさす可アリ行アリの事

文鱗

京持守  
ちね玄寢  
一井

冬松除風  
昌碧松芳  
伞下

約臂一井地水崩深

芭蕉  
常秀

草木大もあらう夜の夢  
宿されね刀さくや村あられ  
ぬ漏れ芭蕉すか夢て  
ゆく宿芭それより神をさうす  
夢ふ見一羽織は傳ひ八年  
其角ふと時

ひぐれ  
天おとそれあま  
かく虎のまくはくせんめくら  
里人のまくはくせんめくら  
旅人と吉田の旅を

萬代に二人芭翁

旅団へ見しや浮世の煙拂

遠懷

家屋を捨て

金

きゆく時ハ水もよどむる  
ゑの獨り寄りて風を吹拂ふ  
金石乃因風舞入るる空世界

え野あ

竹林はふとみかねり更の院  
さくら風をひかへくる。乞食

すせせ

父おお志まく水舟一舟の聲  
芭翁

芭翁  
荷守

杜國  
梅舌

路通  
快宣  
落楊

まくは入湯をゆふる一盤  
一本丸やましもひゆる住處

肩衣ハ縫ゆてゆゑもの衣  
做とくや白髪ようく麻を裳

内肉十日青葉草の亭あて  
かくれ宿やよめ菜の中、妙な菊

うさな草を食うきの頃狼狽  
人乃庵をとられて

さればともにとてまつの弟の宿

四里川人ふの山つらぬ

管事まく身につかねばかくある  
ゆふ人のへりゆづる因ふえふて甚事出を

一念疏遠ノ聲

あらまことのすみのゆく睡ふ

モモアリの暖房や冷陰を變

をうちの暖房や冷陰を變

構の火ふ親子坐て候侘ねハ

國や遠くの血へむちうよの事

あくさん名勝の跡よ後年力争  
をもすとて歴史をかざす

約年や翻不あらむをじ

今 杏雨 杉風 亀羽

岸守 晓梧

芭蕉

杜国

越入

荷子

峠道

去來

西武

芭蕉

除風

越人

意

春の世不<sup>レ</sup>なる人の事<sup>レ</sup>思  
きゆくや余り<sup>レ</sup>ト<sup>レ</sup>も聞思  
せ<sup>レ</sup>て麻衣又<sup>レ</sup>う引れ<sup>レ</sup>  
却<sup>レ</sup>千の因<sup>レ</sup>どう抗<sup>レ</sup>きう<sup>レ</sup>  
度<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>恩<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>歎  
き<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>殊<sup>レ</sup>彌<sup>レ</sup>狼<sup>レ</sup>ハ荒<sup>レ</sup>木<sup>レ</sup>

宮林集<sup>レ</sup>禰色

賈<sup>レ</sup>園<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>徳妻<sup>レ</sup>消<sup>レ</sup>終<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>來  
一<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>待<sup>レ</sup>久<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>を  
さ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>わ<sup>レ</sup>小

持<sup>レ</sup>字

亨<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>つ年<sup>レ</sup>ア<sup>レ</sup>バ  
妻<sup>レ</sup>の名<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>更<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>浮<sup>レ</sup>  
本<sup>レ</sup>房<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>旅<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>  
物<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>ひ火<sup>レ</sup>爐<sup>レ</sup>を明<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ん  
う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>煙<sup>レ</sup>消<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>これ<sup>レ</sup>バ  
山<sup>レ</sup>烟<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>引<sup>レ</sup>  
き<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>轟<sup>レ</sup>風<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>ア<sup>レ</sup>リ  
お<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>体<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>き

妄常

末好<sup>レ</sup>小

萬<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>南<sup>レ</sup>香<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>深<sup>レ</sup>院<sup>レ</sup>化<sup>レ</sup>タ<sup>レ</sup>ル  
妄常迅速

守武

小春  
越入  
俊仙  
舟泉  
嵐義  
松芳  
冬松  
碧昌

一有妻

除川

長虹

冬文

蘭文

心棘

候内事つじふかまきの圖

金下

志於り

南を空てみ羽のやま

銀

元頃

松坂の宿都とひ人の身まづ  
ふるふじやうけ。

拂ひ妙ぢう頑見ぬもろく

荷す

ひのくの追手に

京

往来

人の人ふくく消り盡うな

あ。ふくらむたま時や若く

ひよだ花ち山風と風かくちまく

世

すとく寒のまづかく

あまの御方一萬年と風かく

辻

ひのくはう火祭一ツ主工兵

みゆおとけり

いと秋乃あくべしん一囁り

落居

一風物語て

きく音や小町えねの見ゆま

鴎音

妻乃悲き一

まへく一ちくの里人そなみ

自悦

まほに妻乃まほく一秋のまづ

秋風

宿のまどやくへひそり北風

去來

工房身まづ一後

其角

勢不おききけるみ方言を  
おまかのやがてと會ふ秋の景  
ほる人の追若り

伊豆火もヨリ也さうぞの言ふよ

旅風を身まつする全

あひきりやうめくもんづけり  
鳥邊舟乃とも金舟其の月

秋教

伊勢

神預けたりすらりと四象像

扇てすがれぬそーす四象像

新空

竹竿遠きよ

胡及

連翹やうす生風くあれり  
うそ前木櫻の風うる二王ハ  
あはれもく夢もなげゝ脇の花  
はくうねを扇てく花の寺  
花小酒借とも借ん煙すれ

奥すづらの風の出来狂生一日

東照宮の別當修善房の爲  
大師注を施す法華山傳の傳  
すす前室のすす能作不思議

序品のあらわ

尚首

小春

芭蕉

岸辺

芭蕉

芭蕉

芭蕉

新空

胡及

松葉

杜國

冬松

其角

ちよのひのひよひよひよひよひよ

越人

女房の徳圓がと覽えぞ御裏され  
晴き所あらわの威儀のあらうて  
あひ更次事ひまみしめ

ひりくと落る涙やあらのき  
觀あらの尾上の勝喰ひたり  
古事やつべきぬうね乃葉草

全俊井

八海と  
海と山家賀トヨシモ休生印  
嘆けうも今人す寺の經本  
夏とや本居の紅船歌合

千閑一  
蕉井葉

本居宣長

俗に曰ふせれをと庶のあら  
菩薩のモ漢傳一あらきね  
すせせ

芭蕉  
尚白

腰の筋出寺  
般若心経の内  
般若心経の内  
十如是

一雪

れりゆかまき通すもらふ

荷子

耶身即佛

夏陰の至る處へがんの佛  
かあらひやけの僧をす文長  
がんくやくもあらむお師  
わやうの穴をうちのうすきよ

愚益  
岸洋  
荷子  
援也

文里  
龜羽  
ト枝  
狗雪

平等施一切

捨行ふあらひ人をとめけ  
稻妻小大仏おもむ聖中  
直越不引手眼くそま成  
あらへ四時方無物うつそあ等  
翁と不食不圖半紹子感とて翁

厚毛ふらは

荷子

あら寺の奥野  
燕り立手乃敵えくと  
すみ望て塔を打つや月の舟  
体乃立木本船をうくるは師  
人の身あらわらきかんじる  
まことかくわなま

良馬で又たるゝう一時雨

崩岸

鎌倉の安國論さゆ

越入

古寺の雪  
曙や夜露のき見せし

若守

夢れやか二王乃に枕  
はくと夢てあらまゆせやかに  
羽露をひく人ひまくを御したた  
ふ鏡うちもうせき一年の夢

俊似井润角文其

藥王局七句  
向了梅乃

羅及

神祇アリ

鴻臚  
司馬

二月丙子日庚寅

生年一月の月乃梅  
ありご梅ちうかく庭火ノ  
塔もあつてあと林の梅  
上や空き下や木の枝の  
花のすうなうりひそ中の  
何をわざわざやく梅の花  
貴くかくわくたまう神の梅  
月代もあらわくがく梅の香  
門ひよそ拂り踏み散らう

荷全龜角昌碧雪人於泉兩村五

絵を見る人はほりさかへ  
居不來て萬葉をうるる  
宮の後山に居るまかく  
川の流の木葉の中ひ鐘を  
はくまく神樂の御事奥  
穴等の灯をりくら火串やえ  
被肩一ぱなからい山猿がみ  
川あそそ疊まくれ木枝うな  
あそしや里のよ望く林葉  
此日のお山原はもるわまん不  
免をや極宜のまゐる仰首

古今和歌集内

きよかねおも野をう移く床  
殿の方と寝坐は秋のうつむ  
詮原川夜明の旅のうつむ  
ツツ木の木下へやき庭より  
櫻花を山猿へすくは

祝

荷ひう四十の重よ

肩伏へいくよふかうぬ軍と  
荷ひう四十の重よ

重五  
越人  
半下  
龜洞

冬文

利重  
李  
好  
玄  
龜  
洞  
荷  
未  
学  
落  
松  
芳  
白  
尚  
裕

哉車と行千里と不ゆるる  
琴代やみくとあきむくさ  
高音のよどみの井の石  
すくとぬ風のよよせつる



卷之三

高麗人不卽黑皮

四

先代へ  
梅を知のゆゑ

大井川魚之怪圖

芭蕉

さうされの事は大井川  
川の事と  
かくも梅木をもむかす  
身ゆかりあつたといふ  
あらすじの事もや 五月 兩

左柳  
東里

曠野集真序

素生

越前水入守

水入守水入守水入守

あり丈人のはりはりとすをか成

三人ひき鐵皮をもてて

よしめす。のむきをまつてのくみよ

橋は確もあらわる甚く是を

あら高野をうぢ。まつり

門乃石門付。國乃門。坐

風乃國利正。初秋。坐。雲

武士の毒さうじをもと近

きをもとふつて、底のゆきを

せんすうけす。ゆに草のえ

ははと波をよどす。むかの

まこととまこと。なまゆ

千のいと。北山の下  
焼きもと。一重櫓も焼きも  
ひと。おなき夕日。内。あ  
たがれ。身をぬのやうな櫻葉  
秋とかよ。遙人の妻

明あふ。西の事も桂井焚  
さく。うかうか。利根の川船  
冬の日出で。うかうか。桂井  
車あらわと御國うちをそ  
あらわと。きのの市は桂井さ  
孤はまうやく見ると  
おと。時もの頃せつと

水入守水入守水入守

ナニヤくまよりみよせを了  
月の朝より今かナリはお舞  
松木からとす里の酒桶  
香りのよきが持むる事ありて  
勝とあれば不破乃美能  
也あらす海の浪あらむし  
火箸乃もわざとめりてま  
せんの風景を人の意がう  
あせぬかを此の之より  
はなうれしものと云ふて  
捨て甚ある事無かり  
事あく西月と云ふ手形

大根生地で干すのをガード  
遠山や山よちひすれ  
もとの舟ろふ海のかな重  
のとくや軍を御す者を解  
百足の櫛の半丸にけり  
夕月の垂てのゆきをうめく  
旅宿の簾を解くにまじめ  
其の下をとどめちくねてま  
一沐もとて立ても古絵  
邊のをとて幕をうちて麻  
繩をもと頃とゆり  
年春

六

大根生地で干すのをガード

龜洞

六

ナニヤくまよりみよせを了  
月の朝より今かナリはお舞  
松木からとす里の酒桶  
香りのよきが持むる事ありて  
勝とあれば不破乃美能  
也あらす海の浪あらむし  
火箸乃もわざとめりてま  
せんの風景を人の意がう  
あせぬかを此の之より  
はなうれしものと云ふて  
捨て甚ある事無かり  
事あく西月と云ふ手形

水入水入水入水入水入水入水

配所まで丁度今御用事で  
あらまへみる御代をもつて  
むく起本物のひづけて赤睡う  
門をとけ船子よめあひ  
りままで呉原町の駕原  
おりは連うとまよすす西流  
きもさるちうつわの月  
やくし秋乃やくらうづく  
づくともれおもての序の實の實  
あち不すゆき安房せん屋  
夏の日や風もまぶ涼ひ無事  
桶の水を入らまひけ

的雪舟泉忙水荷子昌薯水泉河昌薯水荷子

二  
湯屋よりアラモチヒトニテ  
宿モト越モトハリモ  
あらわれや 今月  
秋風ニ女車ノ 郡  
御モ赤月キ 沢山ノ所論  
騰シテカタムシルハシキ  
ハ室の前アタマツナリ  
日の出モカヘテ 伊丹ノ壁  
カモチキカカシムナリ  
角モモ寄モカヌハシキ  
塔壁ノ人の笑ひノ番

治昌碧此泉舟龜荷子昌碧此泉舟龜荷子

人をもて思ひ事へてはむれ  
つひもとく不思ひ。 精をも

水舟

戻一き難いさうすまはれ  
樹乃くらばうまほの。 即  
タモ遠隔物うてえもと人  
まよひやううね國ゆ。 国未  
極盡乃ともむだせやく嘗て  
引ひきあく。 勝お我とそ  
けも又の捨がじくめかゆ  
あまく。 かの仲ち一本のく  
火船のはうおせがま

舟東

松芳 冬文 荷子 松舟 泉荷子 冬文 荷子 松舟 泉荷子 冬文 荷子

候因サヘトモ。 半身。 は  
すすり。 鏡。 うつむき。 うる  
浦。 うき。 脱。 うき。 うる  
幾年。 ふ順。 徒。 せぬ。 うき  
よ手。 と双。 扇。 の。 終。 あ。 夏  
か。 な。 も。 うち。 あ。 み。 た。 の。 重  
月。 の。 残。 や。 舟。 島。 井。 の。 君  
打。 不。 成。 か。 ひ。 い。 ま。 の。 風  
殺。 海。 う。 う。 う。 う。 う。 う。 う。 う。 う。  
十月。 の。 き。 く。 乃。 お。 き。 う。 う。 う.  
山。 里。 あ。 あ。 あ。 あ。 あ。 あ。 あ。 あ。

二十一

松芳 冬文 荷子 松舟 泉荷子 冬文 荷子 松舟 泉荷子 冬文 荷子

長椅うそて せんや まか  
さくへかくせき 嵐の月の秋

よのとされへて ひかく  
さくへかくせき 井戸の水をみ

越えきて おまへて つる  
さくへかくせき 井戸の水をみ

舟をまへて おまへて つる  
さくへかくせき 井戸の水をみ

はりへや 満身のまき  
まきへや 満身のまき

暁あく 程繁島 よい  
けいの花の香りあがむかう

殊笑がくるまに ほらへう  
黄昏月の門さかく すがめあ

ゆかく ほらへう すがめあ  
泰うね赤身のて まく

顔、風ふらひましに ほらへ  
きやくもや 雪布を 実ふかすとあ

まく ほらへう まく ほらへ  
まく ほらへう まく ほらへ

ほく まく 待ねまくわむ  
雨のあまよまく 戸をふに

ひまく 事へ草むらまく  
まく まく まく まく

月の秋葉のあまよりうと  
まく まく まく まく

初うね まく まく まく  
まく まく まく まく

紫紬あまよりうと  
まく まく まく まく

六

二二

舟泉

荷子  
冬文

松芳  
冬文

荷子  
冬文

松芳  
冬文

荷子  
冬文

舟泉

舟水 全荷子 全荷子  
舟水 全荷子 全荷子

土肥と久く水をもとめ  
市井の水をもとめ 水をもとめ  
通路をつくる きて進う  
六信あつて 事あらへり  
六信あつて 事あらへり  
六信あつて 事あらへり

月の水をもとめ 水をもとめ  
一月の水をもとめ 水をもとめ  
一月の水をもとめ 水をもとめ  
天仙襲不令食はまし まし  
ゆけうねうけよ 遊びの年  
ゆけうねうけよ 遊びの年  
ゆけうねうけよ 遊びの年

放のやと 肥奥信源はハ申要  
秋の山のふ 吾 浮浪 嘘  
坐そくもすりれけじ生る魂  
八日の月比すまやつま  
山乃端木松の樹との草むか  
まつまきタモムクシとまわ  
置き日下復びひたるにま  
お鐵さむ不積みのちる  
あらへゆる津川の草枕  
忍ともあらぬ顔あて一  
度あつて仕居うる  
二十九

全水全水全水全水全水

全水全水全水全水全水

三方の轍りうるを少くす  
世事乃革鞋を笠人たれある  
陽や小使大承 嘉麻の花  
人かひよわ ちる乃 四季

園のわきけきへ風の寒がま  
かくらふ柄をさりとひくき園中  
の鐵は所なりぬをすむせふ乃  
我乃庭のうちを千度も草木の度  
風の柄をさりあらはすは園外  
野のわきえく夏の秋せ秋  
あくを津て運うてあらゆん

全城下

金水全

かくらうけきと風の寒がま  
真木につゝおきてトトか  
伎乃りの不夜のまぐる  
はれとあれと萬人ゆき連する柄の  
さくねくとまつてはやうへけり  
さあへやくもおれ動見せや裏  
まくわきとけふほのくとく  
大物の人よは暮秋あまくに  
月のなま 沖縄 運う  
管よ拂ひ又候人拂ひ高賀  
秋乃けまか 番目を  
まよひとては壁を崩へ

全人全下今人全下是全人全

寐うすとまう文字のゆうじ  
だうせうあくくをうる候落  
まのく物うおきまう風

二十九  
うち群て浦のふくのほ平風<sup>ひら</sup>  
内へもうてなをれい。大  
辯きをかあお吹きはあが  
あく音<sup>おと</sup>うかう西乃あゆ  
秋合福<sup>しゆく</sup>海音<sup>かいおん</sup>うかう  
まく歎<sup>かた</sup>みるとうひう  
灯<sup>とう</sup>家の壁<sup>かべ</sup>で押<sup>お</sup>く  
匂<sup>にお</sup>がせはせりく風<sup>かぜ</sup>よ  
あく風<sup>かぜ</sup>あかぬきのむかう

三十  
實<sup>じつ</sup>あくく無<sup>む</sup>事<sup>こと</sup>の  
也<sup>や</sup>く國<sup>くに</sup>の御<sup>ご</sup>相<sup>あ</sup>本<sup>もと</sup>  
人<sup>ひと</sup>は<sup>は</sup>清<sup>きよ</sup>くの御<sup>ご</sup>もな  
めま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>心<sup>こころ</sup>の是<sup>これ</sup>曉<sup>あ</sup>  
干<sup>か</sup>せう事<sup>こと</sup>ある。田<sup>た</sup>中<sup>なか</sup>  
むら<sup>むら</sup>く心<sup>こころ</sup>の是<sup>これ</sup>曉<sup>あ</sup>  
皆<sup>みな</sup>聞<sup>き</sup>うれ<sup>うれ</sup>金<sup>かな</sup>佛<sup>ぶつ</sup>  
而<sup>ま</sup>參<sup>さん</sup>もくく時<sup>とき</sup>よ<sup>よ</sup>花<sup>はな</sup>のま  
聞<sup>き</sup>樂<sup>うき</sup>されて<sup>て</sup>穏<sup>おん</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>す

入下入下入下入下人全下

源門乃義  
原のねをあくふゆうと年年

越人

全入全下全入全下全八全下

通事のまゝま おひけの

月

おもむき 池袋御屋の草の下

芭蕉 全越入

かみあさる 秋乃夕くれ  
風ふうきと 障ら 市入

芭蕉 全越入

かみあさる 長安ハ是名利り能

馬のめき高そ自ら引けれ

いもくと所をの空木立

起る世活水一寺の落

山里か古きまに露宿名生え

星休まぬ雨のむけか乃

はるくやるもくねてゆふ

二

月起さくよし 振乃ふ

まじつはくはく月 膜りすすめ

物のそくまた舟宿かくり

月と花はくらうす根と北

雲若さくつよの船り

被笠手の釣り舟かくり

見井六三ひとまきかくすひ

人のおりの居る所の物のひ

初歩工能す 堂乃平瀬

アラシ氣ぬく宮中

二

月起さくよし 振乃ふ

まじつはくはく月 膜りすすめ

物のそくまた舟宿かくり

月と花はくらうす根と北

雲若さくつよの船り

芭蕉 全越入 芭蕉 全越入 芭蕉 全越入 芭蕉 全越入

芭蕉 全越入

芭蕉 全越入

芭蕉 全越入

芭蕉 全越入

芭蕉 全越入

芭蕉 全越入

芭蕉 全越入

芭蕉 全越入

芭蕉 全越入

芭蕉 全越入

極端なまけ者へとされて  
うやうやしく、跡々々たる  
あの西へとくらへつゝそ  
れのまゝの空を消す  
祐ひをもて難い事う

二一  
秋の田をよせぬはうの長きまこと  
さへくさりとては間ねず  
ゆゑく底の本葉が  
逃げちるふ寒瘦でかひあき  
花乃頃はあらじゆの  
風うを含みて體せしむ

翁小伴うれで年上の思ひども承  
舊の事アガシハ支や天守ノ  
之若手の月見酒をうづくらう  
翁翁の重宝をうづくらう  
候てうづくらう葉があらう  
津う葉を被へばらう葉  
翁まことにわづくらう林  
候てうる候まことにわづくらう  
翁は翁よ音をもゆう  
室様に對面の松をうづ  
わざうづける金二万兩  
うづけるを他人とも争はず

金入葉入葉入葉入葉入葉入葉入葉

其角

越入

金入葉入葉入葉入葉入葉入葉

金けくらむてやうへま  
湯熱き耳ふつきゆきをも  
魚をもはくぬ月乃たの舟  
せせりの富士山は茶茶葉  
紅とさへ草の一輪  
腰に垂れき神ねはる  
うきふづけておぬ人ハ候  
西王母あす翔も同うへ景  
や鸞鷺の吉のうきを  
らちにさやかみをあらが  
め乃懇も尊狀のみせん  
やねひのい席りわざれ  
ト

朱はくまん師毛かうり  
タ翁宿り長さ木根のと  
ののりのまをだつて 律  
穴のちふ塵うちたひも松  
ひのきよして 伊勢の お前  
備具不新さむを海を水  
食甚甚に叶へ秋のじまく  
タシノれまくらわき成る雲  
弓をひく。寒 らののまこと  
なまくふを食ひ言ひ頃のひそ  
めまくらうね一の土の風  
の香わき聲

むろ着人全雪越人

岸壁

合

越人全雪全人全人全雪全人全人

我もう 彩海人の碑  
秋うそ寄り山門も湯殿  
月の宿書成りもくに宿ねて  
外で要るか草さけふれ  
ちあひて物小まうらの里  
門紙くとへ城下のみち  
疮瘡身の通路をか斷鬼  
帽すいかうれ草むらやう  
ちうく見すたれのうき雲  
後もいよとりゆうむうたき

七軒うちも壁ありまつて先  
行燈もうて久に渡人  
乞揚せぬようぞや 一ツ保  
明日は暮る 背負月朝  
ちうかの辯も往る女客  
つまみの医者也 後姿也  
ちうむ日へんうれむ長脚  
よひこ鳥とく何をりうん

初雪や走りのびる樹木不  
用のみつきやあひの御紀  
山川や持の雪あまうひく  
人

野水

落  
全格

人越雪人越雪人越雪人

一下八十三

戰とまくと 息へりけり  
ありえりあ押合月は草むら  
川の水をくまく 長櫛の旅

川越の歩みまき秋の雨  
ねじくらう 級乃まくさき  
つるどきつるやかに極の下  
すくきあらよ頃乃うきこひ  
更る度の湯ハわたりとお膳て  
あそくア起きお宿乃傍  
窓の花物ちまひくすがす  
旅するうちの公事羅さ  
京とゆきまのうをひと支ふ

トテハリるり 月のあうり  
耳や歯やよもぎの数す  
風宣やすせふけよの 初午  
二三  
りやも嘗め此かく  
山伏住て 今もく たゞ  
くらぐと金ひねりる采車  
桃もとわとくときくれ  
仰うてほん撃を換かわ  
素くわもひねばれなき  
あゝとりやうふうきのそ  
かく府中を経ねうい  
兩みて雲のちまくおりるや

水梧水梧水梧水梧水梧水梧

梧水梧水梧水梧水梧水梧

浦風の脛 晴まぐる月涼  
みよめあき紀伊の山更衣  
若者たき夫羽てたる君の法  
藤くらよ香木をまいくけ  
ちかづれりきくを脇ぐん  
寒子乃絹の裾ふ 藤角  
さすまつ圓もまく 緑葉  
雪散やどりすが草をぬりう  
木をまみれわづらむねに松の枝  
桺ふうふ 人へ 乃 直  
坐車ふたうて資の深すかき  
まくらもせはほほの寐入月

一胡長一龜長胡龜一胡長  
并及虹并及岸并乃衝

一季承主申冬許六亭與行  
けふそくへ申年かんむ

卷之三

胡長嵐一胡長嵐一胡長嵐一胡及虹洋井及虹洋井及



